

ノダとその否定をめぐって

戴 宝 玉*

キーワード: ノダ, ノデハナイ, 二次情報, 否定, スコープ

要 旨

本稿は、ノダの基本的用法を情報の流れにおいて追究し、あわせていわゆるノダの否定について掘り下げて考えてみようとするものである。ノダに関して、推論の根拠となる事態を一次情報、推論の結果となる事態を二次情報と仮称し、一次情報は異なる話者でも共通の理解が得られやすいことから、即物的かつ一義的であり、しかも常に新情報の担い手という特性を持つ。二次情報は、話者が異なれば結論も異なりがちであることから、恣意的かつ複数選択肢が可能という特性を持つものとする。そして一次情報をもとに推論を行ない、話者によって社会的なコンテキストにおいて自らの判断が示された場合、これが二次情報となり、その文末表現にノダなどが選択される。本稿ではノダを二次情報に關与する助動詞だと考える。

ノダが、複数選択肢のうち一つだけを選択し提示するのと対照的に、ノデハナイは、表現意図に要請されて、複数ある選択肢の中から一つだけを他との対照・比較において排除することを表す。その際、文の述語だけではなく、述語を含むことから全体が非選択的に排除されるため、ノダとノデハナイを、選択・非選択の関係にあるものと見なし、特に分類しないことにした。

1. はじめに

日本語の文末表現ノダは外国人にとって難しい。日常会話でノダを多用すると、「理屈っぽい」と言われ¹、論文などでノダを頻繁に用いると、「何だか机を拳骨で叩いている感じがする」と受け取られることがある²。かといって、ノダをまったく用いずに避けて通ることもできない。構文的な理由で必要である場合が多いからである。

幸い、近年ノダへの関心が高く、多くの研究が重ねられ、その本質について共通の認識ができつつあるといってもよい。しかし、ノダの用法が複雑なためにその本質を理解することは容易な

* DAI Baoyu: 上海外国語大学日本文化経済学院助教授。

¹ 元留学生の経験談による。

² 多田道太郎『日本語の作法』(潮出版社, 1979)による。

ことではなく、その表面に現われたものに目をとられ、本質がとかく見失われがちであることもまた事実のようである。本稿は、今までのノダに関する先行研究をふまえつつ、文末表現だけに限定して、「のだ」「のか」「のだらう」「のかもしれない」「のではない」をすべてノダで代表させ、筆者なりにその本質について掘り下げて考え、あわせて普通「のだ」の否定といわれる「のではない」にも触れてみる。

2. これまでの研究

ノダについて、これまでの研究成果の一例として、小金丸(1990a)(1990b)を挙げることができる。小金丸はノダをムードのノダとスコープのノダに分類し、ムードのノダに関して、小金丸(1990a)で次のように述べている。

話し手が提出する命題と状況や文脈との結びつきを示すのが、ムードの「のだ」の機能である。

そして、小金丸(1990b)では、次のように述べている。

ある事態を根拠として推論を行ない、その事態が成立した原因・理由として導き出した命題を示す場合には、「のだ」を用いる。

同様の指摘が多少表現の違いがあっても、ほかに佐治(1981)、国広(1985)、田野村(1990)などにも見られる。

先行諸説を筆者なりに整理してみると、ノダの本質はある事態をもとに推論を行ない、その結果を示すことにあることから、いずれの説もノダの用いられる文を二つに分けて考えていることがうかがえる。すなわち推論が行なわれる根拠となる前提と、推論が行なわれた結果である。もっとも前提といっても、必ずしも言語化されたものとは限らないが、ここではこれらのものも言語化されたものに準じて扱うことにする。

3. ノダ文の表現特性

(1) 「家にいると、子供もいて落ち着かないので、国立病院に入れてもらった」

「じゃあ、大分お悪いのですね」(渡辺淳一『野わけ』)

(2) 私は答えなかった。答えられなかったのだ。(眉村卓『公園』)

(1)(2)は典型的なノダ文である。両者とも前提と結果からなっていることはすでに触れたとおりである。ここでは前提をS1、結果をS2と呼び、まずS1とS2が表現上それぞれどのような特性を持つのかを観察してみる³⁾。

まず次の例を見てみよう。

- (3) ずいぶん派手なシャツですね、と久しぶりに会った人からよく言われた。年齢をとったんで、そんなものを着るようになったのかね、と嘲笑するように言った友人もいる。
(常盤新平「ヤクザのシャツ」文春文庫『おやじの値段』p. 238)

以上は、ある随筆の冒頭の部分である。この文を会話文に整理しなおすと、

- (4) ずいぶん派手なシャツですね。
(5) 年齢をとったんで、そんなものを着るようになったのかね。

これらは同一人物を見て、同じ場で下した判断である。(5)がある事態を根拠に推論を行なった結果を示すノダ文であるのに対して、(4)はどのような性格の文であろうか。

相手の着ているシャツを見て、そのまま「ずいぶん派手なシャツですね」と表現しているところは、多少自己の感想・評価を交えながらも、現実の世界を正確に伝えようとする話者の姿勢が見られる。このような姿勢によって表出された判断を、ここできりに即物的な判断と呼んでおくことにする。ちなみにこの「即物的」という用語を『学研国語大辞典(第二版)』で調べると、次のとおりである。

「(主観をいれないで)実際のものに即して、見たり考えたりするようす。認識や表現の仕方が、対象の現実的な姿に忠実であろうとするようす」

即物的判断とは、対象を忠実に再現しようとする姿勢だとすれば、当然、大筋において、同一対象について誰が見ても同じような結果になる。したがって、同じ文脈において、

- (6) 派手なシャツだろうね。
(7) 派手なシャツかもしれないね。
(8) 派手なシャツではないね。

と言った場合、不適切な発話となるだろう。だれが見ても明白な事実に対して、推量、不確か、否定などを挟む余地がないからである。

だが、同一文脈なら、(5)のパラエティとして次の文は許容されるように思われる。

- (9) 年齢をとったんで、そんなものを着るようになったのだろうね。
(10) 年齢をとったんで、そんなものを着るようになったのかもしれないね。
(11) 年齢をとったんで、そんなものを着るようになったのではないね。

これらの文が使用可能なのは、たとえ同じ事実をもとに推論を行なっても、話者によって異なる結果が導き出されることもありうる、ということによる。特に(8)が不可とされるのに対して、(11)が使用可能であることはノダの否定を考える上で興味深い。

以上で観察した通り、同じ事実に対して、即物的な判断も可能だし、推論をふまえた判断も

³ 紙谷栄治(1981)が指摘したように前提と結果が同一文中にある例も見られるが、ここでは別々の文で表すことを一般的な形として捉え論を進める。

可能である。そこで得られる判断は、前者は一義的であるのに対して、後者は複数の選択肢が選択可能だということがわかる。

再び(1)(2)の観察に戻る。仮に(4)(5)を同一話者の連続的な発話とすると、以上で観察した表現上の特性がそのまま、例(1)(2)にも当てはまるといってもよい。

例えば、(2)において、S1は一義的であるため、「答えなかった」という事実を無視して、「答えた」と強引に主張することができないし、またS2は複数選択肢が可能なため、次のように異なる結果を表す文が可能となる。

(12) 私は答えなかった。答えようがなかったのだ。

(13) 私は答えなかった。答えたくなかったのだ。

このように、ノダ文のS1が即物的かつ一義的であり、S2が恣意的かつ複数選択肢が可能なのはほぼ間違いのない事実である。では、S1とS2との間にどのような相関関係が見られるのだろうか。

3-1. 一次情報と二次情報

(2)におけるS1とS2の順序を次のように変えるとどうなるか。

(14) 答えられなかったのだ。私は答えなかった。

(14)は、日本語としてあきらかに不自然である。つまり、S1とS2の順序を変えてはならないということである。ノダの機能からして、これはむしろ当然のことであろう。すくなくとも(14)にかぎって言えば、S2はS1をもとにして推論が行なわれているのだから、当然S1を先行させるべきである。この意味においてS1は一次的であり、S2は二次的であると考えてもよい。ここでは、この意味も含めて、S1で表す前提を一次情報、S2で表す結果を二次情報、というように呼びかえることにして、議論を進めていく。

ただ、情報といっても、この用語はさまざまな意味で用いられている。情報論一般に関して議論するのは本稿の目的ではないので、ここでは、「言語伝達の過程において、伝達・交換される未知の事柄・事態」というごく常識的な意味に限定して用いることにする。情報伝達交換の一般的な形としては、まず発信者から新しい情報が発信され、それを受信者が受信し、これを社会的なコンテキストにおいて解釈し、その解釈・加工した情報を再び新しい情報として相手に発信する。この伝達受容の過程を繰り返しながら会話が展開されていくと考えられる。(1)がその一例である。

もともと(2)のような書き言葉においては、発信者は常に特定の個人に限定される。だが、このような場合でも、新しい情報を提示する場合もあれば、新しい情報を解釈・加工して二次情報として提示することもある。いわば作者が傍観者になったり当事者になったりする形で読者に伝えるわけである。そしてこれを繰り返すことによって、文章が展開されていくという点におい

て、本質的に(1)と同質であるように思われる。

ここで特に注目したいのは、一連の情報伝達受容の流れに見られる情報そのものの相違とそれにもとづく表現上の相違である。一次情報と二次情報とでは、当然情報そのものに関してなんらかの相違があるはずであり、表現上においてもそれに相応しい表現形式が用意されてしかるべきと考えられる。

情報そのものの相違に関しては、すでに「ノダ文の表現特性」の部分で何度も指摘したとおりである。また、その形態上の特性に注目すると、S1には特別な表現形式を伴わず、S2にはノダのような表現形式が伴って用いられる、というのが、その表現上の相違と言えよう。したがって、筆者が本稿で一次情報とか二次情報とかと呼ぶのは、単なる順序という理由からだけでなく、むしろ、両者の相違を考える上においても必要であるように思われる。むしろ、二次情報に与る文末表現形式はノダ以外にもあると考えられるが、ここでは他の文末表現形式には深入りしない⁴。

次に一次情報のもう一つの側面を見てみようと思う。

3-2. 新情報の担い手としての一次情報

S1はいわばS2の推論が行なわれる情報源であるため、当然そこに新しい情報を担って登場することが要求される。その新情報を提出することによって、双方の間に情報共有の共通基盤が作り上げられ、聞き手は、その共通の基盤に基づいて、話を展開させていくことになる。

このことを逆に捉えると、一次情報文にはノダは後続しない、ということでもある。事実、田野村(1990)において、「ノダが用いられない場合」という一節を設け、ノダが用いられない場合を考察しているが、そのほとんどがここで言う一次情報に相当するものようである。このことは偶然の一致とは言えないであろう。

ここで一部引用すると、例えば、(15)のような突発的に生じた事態や事態の兆候、(16)のような話し手の内面において生じたばかりのことがらの表現、(17)のような話し手の意思を、その意思決定の時点において表明する場合、などである。

(15) あれ、財布がない。

(16) ああ、疲れたなあ。

(17) わたしも行きます。

これらの文にノダが用いられないのは、誰もが異存のないところである。これらは、いわば、話者が言葉として表出するまで、聞き手にはおよそ容易に察知できない新しい情報である。田野

⁴ 戴宝玉(1999)で、二次情報を予告するトイウトコロヲミルトと呼応する文末表現を調べた結果、ノダ、ラシイ、ヨウダ、ソウダが高い順位で続いていることが分かっている。

村(1990)はそのほかに、話し手の推量的な判断、話し手の評価、などについても触れているが、どちらも聞き手にとって未知の新情報(あるいはことさらに新情報として扱う点)においてはさほど相違はないように思われる。

以上は主として話し言葉に基づいて考察したが、書き言葉に関しても例外ではない。例えば、小説の書き出しの場合、ノダが用いられないのが普通である。

(18) むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。(坪田譲治『日本むかしばなし』)

(19) 吾輩は猫である。名前はまだ無い。(夏目漱石『吾輩は猫である』)

ただ、小説の地の文の場合、実際調査してみると、その多くがここで言う一次情報文によって構成され、二次情報文というのはむしろ少ない。また同じ言語化されない一次情報から、(4)のような一次情報文が展開したり、(5)のような二次情報文が展開したりすることもあるし、さらに(5)のような文を受けて、一次情報文または二次情報文として展開していくということも考えられよう。その文の流れにおいて、そこにどのような原理が働き、その原理によって、一次情報文と二次情報文の選択がどのように行なわれるのか、これらの点については、残念ながら、いまのところ、まだ不明である。

いずれにしても、以上の観察で、一次情報はつねに新しい情報の担い手であることを再確認できたと思われる。ちなみにこの一次情報について、これまでさまざまな用語で用いられてきた。たとえば、「上にある文によって表される判断」(佐治 1981)、「問題となるある事態」(山口 1983)、「既定命題」(国広 1990)、「背後の事情」(田野村 1990)、「先行文脈と状況」(小金丸 1990a) などである。このさまざまな用語を情報の流れにおいて捉えなおしたのが本稿で言う一次情報と言えよう。

3-3. ノダと二次情報

情報の流れという見地から、ノダの本質を捉えなおすと、次のようになるだろう。

日本語の文を情報の流れから見た場合、一次情報と二次情報とに分類できる。一次情報は事柄・事態を表現する上で、即物的であり、一義的であるのに対して、二次情報は恣意的であり、複数選択肢が可能である。そして新情報の担い手である一次情報をもとに推論が行なわれ、話し手によって社会的なコンテキストにおいて、自らの判断が示された場合、これが二次情報となり、その文末表現にノダなどが選択される。ノダはいわば二次情報に関与する重要な助動詞であるといえる。

このノダの本質は、ノカ、ノダロウ、ノカモシレナイについても当てはまる。これらは、ノダに疑問、推量、不確かの意味が付加したに過ぎないからである。例えば、

(20) 「君のことはなにかも知っているような気がするね。」「そうですか。駒ちゃんにお

聞きになったんですか。」(川端康成『雪国』)

(21) たか子はウトウトと仮睡した。いろんな人にあって疲れたのだろう。(石坂洋次郎『陽のあたる坂道』)

(22) 二階の窓は開け放され、電灯の光があかあかと灯っていた。まだ克平たちは仕事をしているのかも知れない。(井上靖『あした来る人』)

ただ、観察の範囲を広げると、(14)のようなS1とS2が順序逆転した用例もないわけではない。このような傾向はノカには特に顕著なようである。例えば、

(23) 夕立でも来るのかあたりは薄暗くなっていた。(向田邦子『父の詫び状』)

このようにノダは二次情報に与ると捉える利点は、ノダ文の個々の用法にとらわれることなく、統一的に把握することが比較的容易になることにある。例えば、いわゆる感覚感情形容詞が第一人称以外に用いられるには、なぜ「のです」が必要なのか、という説明にも役立つ。それは多くの場合、言語化されない一次情報をもとに行なわれた推論の結果だからであると説明すれば学生も納得しやすいであろう。この説明は、二次情報を表す文法的手段をもたない言語を母国語とする学習者には特に効を奏するようである。

むしろ、ノダがすべて二次情報に与るとは限らない。例えば、次の文がそうだ。

(24) 「きみ、両親は?」「母親が田舎にいるんです」「お父さんは?」「戦死したんです」(源氏鶏太『女の顔』)

これまで観察してきたノダは、いわば、二次情報から一次情報への遡及が可能であり、文脈依存性の強いノダ文である。一方、(24)においては、このような論理的な遡及はほとんどできない。いわば、(1)(2)は文脈依存性の高いノダであるのに対して、(24)は場面依存性の強いノダであると言うべきかもしれない。田野村(1990)も「 α (本稿で言う一次情報に相当)を具体的なことから指摘することは困難である」とし、これを「ある実情を表す」ものとして「あることからの背後の事情を表す」ノダと区別している。

4. ムードのノダとスコープのノダ

ノダの分類で言えば、小金丸(1990a)において、ノダはムードのノダとスコープのノダに分類されていることは、すでに触れたとおりである。ムードのノダとは、氏によると、

「のだ」がなくとも一文としては成立しうる文に加えられて、「説明」等と言われるような話し手の心的態度(ムード)を表している。そこで、この種の「のだ」をムードの「のだ」と呼ぶことにする。

氏が規定したムードのノダを詳細に見ると、(24)のようなノダ文との境界線はかならずしもはっきりしているわけではないようであり。見解の分かれるところだが、(24)のようなノダを除

くと、ほぼ本稿の二次情報のノダに相当すると言えるだろう。

また、氏は、「君は、終戦の年に生れたのか」という質問の回答として、次の例をあげ、

(25) イヤ、終戦ノ年ニ生レタノデハナイ。

そして、文中のノデハナイについて、

このような「の」に「だ」がついた形を、ムードの「のだ」とは違う機能をもった「のだ」だと考え、スコープの「のだ」と呼ぶ。

と指摘している。さらに(25)を(26)と比較し、次のように分析している。

(26) 私は終戦の年に生れなかった。

(26)では、「ない」の直前の「生れる」が否定されて成立しなかったのに対して、ノダを用いた(25)において、「生れる」こと自体は成立したのであり、「終戦の年」という部分が否定されている。そこで、否定作用が及びうる範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカスと呼んでいる。つまり、動詞以外の要素を否定するには、ノダ(実際はノデハナイだが)を用いて、否定のスコープを拡げることが必要なのである。

ここまでは氏が久野(1983)説を引き継いでいるようだが、次から氏は久野説を修正し、(27)において、フォーカスとなっているのは、動詞の語義的な部分、すなわち「買う」「借り」の部分だけがフォーカスとなることを指摘している。

(27) 「あ、買ったんじゃないよ。借りたんだ」

これは、(27)のような述語だけによって構成される文だと、否定は否定なしに述語自体に向けられ、そのため、フォーカスのもって行き場が失われ、スコープ説にとっては不都合であることから、そこで目を述語内部に向け、考案されたものと思われる。

以上、小金丸(1990a)を簡単ながら紹介した。たしかに日本語のノデハナイ文は、(28)のように、ノダによって述語以外の要素がスコープに入り、「悪い」という述語だけが残って、「私が」がフォーカスとなって否定されているように見える。

(28) 「私が悪いんじゃないわよ。あんたが悪いのよ。(省略)」(川端康成『雪国』)

だが、このスコープのノダに関して、若干疑問に思う点がないわけではない。

4-1. スコープ説の問題点

まず、文中のどの要素がフォーカスになるのかを、決めるのは容易なことではないという問題が挙げられる。(28)のような単純な構造をした文なら、フォーカス説には好都合であるが、次の(29)の場合、そうはいかないだろう。

(29) シゲ子と愛犬が昼寝をしているのではないことは、一目で判った。(西東登『老人と犬』)

(29)において、可能性としては、「シゲ子」「愛犬」「昼寝をする」のどれも否定されうる。ま

た極端な場合、「シゲ子と愛犬ではなく、シゲ子一人で昼寝を」のように捉えることもあながち不可能ではない。少なくとも前後の文脈から切り離され、この文だけを見た場合、さまざまな解釈の可能性があることはあきらかである。小金丸(1990a)もこのようなフォーカス不明の文の存在に言及し、「各要素の文の成分としての性質、語順、音声上の強勢、といった要因」で、ある程度カバーできると指摘しているが、しかし、それならば、これらの要因は非ノダ文にも機能するはずであり、フォーカスを判定する上で決め手とはならない。

次に、フォーカス説では、(27)のように、述語が部分的に否定されることはあっても、述語全体が否定されることはないという指摘だが、しかし、次の(30)は、むしろ(27)と正反対のケースで、述語全体が否定されていると見るべきではないだろうか。

(30) 「あれはシャッターを開けたんじゃなくて閉めたんです。」(つかこうへい『つかこうへい戯曲シナリオ作品集4』)

これで「シャッターを開けたのではなく、シャッターを閉めていたのだ」における「シャッターを」のような述語以外の要素ではなく、述語自体が否定されることもありうることは明らかである。ということは、スコープのノダが後続しても、フォーカスが述語に向けられることもありうるということである。述語自体が否定されてしまうとすると、(30)と(26)との否定の違いを指摘することが困難になり、両者の違いをスコープ説以外に求めなければならなくなるだろう。

4-2. 「点」としての否定と「面」としての否定

以上、スコープのノダについてフォーカスの不明確なケースと述語自体が否定され得ることをみた。以下、なぜそうなるのか、その理由について考えてみたい。

スコープのノダにおいて、その鍵となるのはフォーカスであり、フォーカスといえば、焦点という意味だから、否定された部分を「点」として考えられてきたことがうかがえる。例えば(25)では、「終戦の年」という部分が点として捉えられ、その点に否定が向けられている。だが、次のように点として処理しきれない用例もあることを見逃してはならない。

(31) 「違う。大違いだよ。逆になってる。共犯者が松本と同じ顔なんじゃなくて、松本が共犯者と同じ顔なんだぜ」(清水義範『不透明人間の挑戦』)

(31)において、点としてのフォーカスを特定することはきわめて困難である。ここでは、「共犯者が松本と同じ顔であること」と「松本が共犯者と同じ顔であること」という二つの「ことがら」が対比され、その一方が否定されていると見るべきであろう。なぜなら、仮に述語にもっとも遠い部分である「共犯者」をフォーカスにすると、「共犯者」以外のだれかが松本と同じ顔ではないという意味になってしまい、これは、明らかに見当はずれな解釈であろう。

堀川(1990)は、スコープ説を認める立場に立って、ノデハナイ文の焦点について精密な考察

を試みているが、その中で、(30)のように動詞そのものが否定されうることにも言及し、また(31)のように「節全体が焦点になるタイプは、何らかの焦点を指定する特徴を全く持たない文」がありうることを指摘している。節全体が焦点となるのなら、もはやフォーカスとスコープの区別がなくなり、厳密な意味では、焦点とは言えない。むしろ、ここで言う「ことがら」に近づいてくるのではなかろうか。

そこで、筆者は否定の向けられる対象を「ことがら」として捉えることを提案したい。フォーカスが点であるなら、「ことがら」を「面」と呼ぶことができよう。したがって、ノデハナイ文について、本来ならば、「面」として捉えるべきではないだろうか、と筆者は考える。(25)にしても、「終戦の年に生れたこと」と「その翌年に生れたこと」が「面」として比較され、その一方が否定されていると解すべきであろう。

思うに、日本語話者なら、だれでも(25)のような文に触れたとき、おそらく暗黙のうちに少なくとも二つの「面」を比較し、そのうちの一つを「面」として否定するような認識のプロセスを持っているように思われる。ただ、相手がすでに「生れている」ことは否定できない事実であり、そこで、その文を理解するためには、「点」によって構成されている「面」をいったん「点」に還元し、「生れた」という「点」が可能性として排除された以上、残りの選択可能な「点」といえば自然に「年」に限定されてくる。しかも、そこで選択された「点」が否応なしに目立ってしまうため、あたかも「年」だけが点となって否定されているような印象を与えてしまい、ついにはことがら全体が否定されていることを見逃してしまう、ということが認識の深層に流れているのかもしれない。(25)は簡単な作例だが、実際の文となると、もっと複雑であり、さまざまな要素が「点」として析出されるため、いっそう全体像としての「面」を見失いがちになるのではなかろうか。

だが、すでに観察したように、(31)において、「面」として見たほうが全般に無理なく説明できる。このように、「点」よりも「面」のほうが説明として有効であることは、ノデハナイの場合だけでなく、いわゆる取り立て助詞を考える場合にも当てはまるようである。

仁田(1997)において、「洋平もやってきた」の例をあげ、「洋平」をある類に属する要素群との関係付けの中で捉え、「洋平」が同一の類に属する要素群に対する関係のあり方を、系列的な関係(paradigmatic relation)と定義した上で、次のように述べている。

さらに言えば、類の抽出そのものは、その文の述語(この場合「ヤッテ来ル」)を介して初めて可能になる。そのことからして、要素の、同一の類に属する要素群との関係付けは、当の文が表す言表事態と他の言表事態との関係付けを前提とし、それを通して成り立っている(下線は筆者)。

「洋平」という「点」が系列的関係にある他人と比較するということにおいて、フォーカスとの間になんらかの共通点があることは否めない。ここでは、その「点」だけが云々されるのでは

なく、その「点」を含めた「言表事態」全体が比較され問題にされていることは注目に値する。言表事態とは、「ことがら」であり、「面」であることは言うまでもないであろう。つまり、「洋平も」は、「洋平がやってきた」ということがらと、「一郎がやってきた」ということがらとの比較を前提としているのであって、「洋平が」と「一郎が」だけを比較しているのではない、ということである。

5. ノデハナイは非選択を表す

ノデハナイ文において、否定の対象を「面」として理解すべきであることは、以上の観察でほぼ明らかになった。次にノデハナイは、ナイとどう違うのか。ノデハナイにおいて、なにが否定されるのかという問いに答えなければならない。

ノダの定義のところ、ノダは二次情報に關与する助動詞であると筆者は提案した。そして二次情報の表現上の特性として、その複数選択肢可能性を挙げた。とすれば、相手が自分と異なる判断をし、その結果を示してきた場合、当然、それを排除して、例(2)(12)(13)のように複数の選択肢のうち、自らの判断を提出することになる。ノダのこのような性質から、ノデハナイはつぎのように考えることができるであろう。

すなわち、ノデハナイは情報の流れにおいて、複数ある選択肢のうち、表現意図の必要から、そのうちの一つを排除し、それに代わる選択肢を明確に提示するか、あるいはそれに近い方法で提示することを意味する。

ここで、あえて「否定」という用語を避けて、「排除」を用いたのは、ナイによる否定は直前の述語に限定され、他には波及しないし、しかもその否定によってその述語が成立しなくなるのに対して、ノデハナイの場合、仮にそのことがらが否定されても、それは別のことがらに取って代われ、陰の存在として裏に回ったにすぎないのだから、一般的な意味で言う「否定」とは異なる、と筆者が考えたからである。そして、排除されたということを、当該の選択肢がはずされたという意味で非選択と本稿で表現する。

この角度からあらためてノダを眺めると、ノダの機能も複数ある選択肢の一つを選択の結果として提出することにあるのだから、いわば、現在は表舞台に立っていても、いつでも表舞台から排除されて陰の存在として裏側に回される可能性を背負っているといえよう。このように、ノデハナイが非選択であるとすれば、ノダは選択された形であり、ノダとノデハナイは表裏一体の関係をなしているといえることができる。

5-1. ノダとノデハナイは選択・非選択の関係

以下の(32)は、いわば、選択と非選択の両方を明示した例である。

(32) 私は観光などしない。嫌いなのではなく面倒臭いのだ。(村上龍『村上龍全エッセイ 1987-1991』)

ここで特に注意したいのは、この文から「嫌いなのではなく」を取り去ってしまえば、(2)と同様な、いわゆるムードのノダ文になってしまう、ということである。(2)と(32)の違いは、前者が選択されたものだけを提示したのに対して、後者は、非選択をも同時に提示したというにすぎない。

ノダとノデハナイが選択・非選択の関係にすぎないとすれば、この「嫌いなのではなく」の部分も、ムードのノダと本質的な違いがないはずであり、両者ともムードを表すことになり、ノデハナイは、ノダの一種の変形に過ぎないことになる。ただ、「面倒くさいのだ」が直接的に(選択的に)判断にかかわっているのに対して、ノデハナイが間接的に(非選択的に)判断にかかわっているという違いはある。

もっとも、選択・非選択の関係が見出されるとしても、両者はまったく同等な関係というわけにはいかない。当然、選択を表すノダが主で、非選択を表すノデハナイが従属的であることは、(32)において、「～のではない」を省略できても、「～のだ」を省略すると、文として不自然であることから裏付けられる。

このように見てくると、ノデハナイはムードのノダの一種として処理されるべきであって、特別のスコープのノダと別類として立てるには及ばないようである。両者を対等に張り合うものとして分類するには、スコープのノダは従属的であり、非力に過ぎるというべきであろう。

すでに触れた通り、(32)を「私は観光などしない。嫌いなのではない」とだけ言いかえると、不自然になる。すると、それに代わる選択肢を明示する必要が要請されてくる。それは、普通「～ではなく、～である」の形をとるが、「～ではなく、～である」という場合も少なからずあることを見逃してはならない。前に「それに近い方法で提示する」と述べたのは、このような非ノダ文で終ることもありうることを考慮に入れたからであり、(33)がその一例である。

(33) 家へついた時、夫の加治はまだ会社へ行かないで、浴衣がけで日本風の庭に立っていた。庭いじりが好きなのではない。明らかに峯子の帰りを待つために時間つぶしにそうしていたらしいことが、何気ない動作の中はっきりとわかった。(曾野綾子『華やかな手』)

(33)において、「明らかに～」以下の文を省略しにくいのはこれまで見てきたとおりだが、本来選択された形としてのノダが用いられていない。本来なら「峯子の帰りを待つためにそうしているのだ」というべきところを、文が複雑に長く続いたためにノダが流れたものと見るべきであろう。しかし、ノデハナイが非選択を表す点においてはなんら変りはない。

5-2. 非文末表現のノデハナイ

以上、いわばノダの陰の存在として、非選択のノデハナイを観察したわけだが、これがノデハナイのすべてではないことは(29)を見れば明らかである。連体修飾語として機能するこのノデハナイは、どうみても非選択の意味だとは考えられないからである。

また、次のノデハナイも非選択とは程遠いようである。

(34) 勉強は本だけですのではなく、先生の話聞くのも勉強のうちだ。(外山滋比古『日常のこぼれ』)

(34)は、いわゆる中止の場合である。中止として用いられるノデハナクはノデハナイとは若干性格が異なるようで⁵、ここでも非選択とは考えられない。

さらに、ノデハナイに他の文末表現がつづく場合も例外ではない。

(35) その女は声は大きい、怒っているのではないらしい。(津村節子『女の椅子』)

(36) もっとも、おれの場合、かたき討ちとは少しちがう。あの男に、おれは憎しみをいっているのではないだ。(星新一『おのぞみの結末』)

(35)(36)はいずれもノデハナイにさらに他の文末表現が後続している場合である。両方とも非選択だとは考えにくい。特に、(35)においては、もしモダリティ度という用語が許されれば、この場合のノデハナイはモダリティ度がラシイよりも低いことが看取される。

以上あげた例の共通点は、いずれも文末表現ではない、ということである。多くのデータを総合すると、ノデハナイはノダより文末表現の位置から外れたところに現われやすいようだ。一例をあげると、ノデハナイカギリとノデナクテハのような非文末表現の用例が数例見つかっているが、ノダにカギリとテハが後続する用例はこれまで見つかっていない。そして、非文末表現としてのノデハナイは、その非選択性が薄らぎ、モダリティ度が落ち、単なる否定に一步近づいてくると見受けられる。これは、また、当然ながら、一助動詞としての定着度にも影響してくるであろう。スコープのノダについて、小金丸(1990a)に、「スコープの『のだ』はムードの『のだ』のように助動詞化しておらず、『の』+『だ』という組成により近いものだと考えられる。」という指摘があるが、ノデハナイの緩やかな組成は、非文末表現のノデハナイにこそ当てはまるのではなからうか。

一方、(29)(34)(35)(36)は、単なる否定とも異なり、そこから否定を取り去ってもなにかが残ることもまた事実である。ただ、この「なにか」を究明することは現段階では容易なことではなく、文末表現であるノデハナイも含めて、なお研究すべき課題は多い。

⁵ この点ではノデアッテも同じで、『日本国憲法』のようなノダの使用を許さない法律文でもノデアッテだけは例外である。

6. 終わりに

本稿は主として、不十分ながら情報の流れから文脈依存型のノダについて観察した。それは、このノダが論理的思考によって支えられているため、外国人研究者には文脈による追体験が可能であり、まだある程度扱いやすいほうだからである。そして、文脈依存型のノダとノデハナイを選択・非選択という表裏一体の関係にあると考えて、これ以上分類せずに同一助動詞として扱った。ノデハナイについては、文末表現としてのものと、非文末表現としてのそれとの間に一助動詞としての定着度やモダリティ度に若干違いがあることにも言及したが、今後の研究に待つ部分が大きい。

ノダにはほかに前述した場面依存型のノダもあり、もしノダを分類する必要があるとすれば、この文脈依存型と場面依存型とに分類すべきかもしれない。ただ、文化のもっとも深層部にかかわる複雑な対人関係の認識によって支えられているため、その場面を適切に再現することは、このような環境にない外国人にとって、至難の技であり、いまの筆者にとって手にはおえないので、今後の研究の課題にしたい。

付 記

本論文は、筆者が交換教員として桜美林大学に滞在中に作成したものであり、謹んで桜美林大学に心より感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 佐治圭三(1981)「“～のだ”の本質」『日語学習与研究』1981年第3号, 北京对外貿易学院。
 ——(1997)「『～のだ』の中心的性質」『京都外国語大学研究論集』L号。
 紙谷栄治(1981)「『のだ』について」『京都府立大学学術報告人文』第33号。
 山口佳也(1983)「『～のだ』の文の本質をめぐって」『日語学習与研究』1983年第5号, 北京对外貿易学院。
 久野 暉(1983)『新日本文法研究』, 大修館書店。
 国広哲弥(1985)「『のだ』の意義素覚え書き」『東京大学言語学論集'84』, 東京大学文学部言語学研究室。
 ——(1990)「意義素の展開」『東京大学言語学論集'89』, 東京大学文学部言語学研究室。
 小金丸春美(1990a)「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」『日本語学』9-3。
 ——(1990b)「作文における『のだ』の誤用例分析」『日本語教育』71号。
 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法I「のだ」の意味と用法』, 和泉書院。
 堀川智也(1990)「『のだ』を用いる文の焦点」『言語文化部紀要』19号, 北海道大学。
 戴 宝 玉(1999)「ノダと推論を表す他の助動詞」『日語学習与研究』1999年第2号, 北京对外经济贸易大学。